

《聞き取り調査》課外活動の思い出

波岡實氏に聞く（卓球部の思い出）

※昭和三四年商経学部経済学科卒

卓球を変えた男

最初に、これを参考までには是非観てほしい。これは私が日本卓球協会で「卓球のイメージを変える」という仕事をやった時に提案したルールです。これが今、世界のルールになっています。

〔卓球を変えた男〕の映像が始まる。以後の会話は映像を観ながら
これはNHKが制作した番組で、映っているのは代々木体育館で開催されている全日本卓球選手権大会です。私の作戦勝ちなんです
が、日本卓球協会にも大学と一緒に理事会があります。理事だけで二三人もいますから、その理事会・評議員会には全国から百人ぐらい集まるんですよ。この大会の次の日に、理事会・評議員会で卓球のイメージをどのように変えていけばいいか、ということを決める会議があった。そこで決まった新しい卓球のイメージを踏まえて卓球



台、ボール、フロア、とファッショナブルなユニフォームでデモン
ストレーションをメディア向けにやった。選手は全部専修大学の部
員です。そうしたらNHKだけじゃなくて全局のテレビ局が来て、
そのカメラの前で、その時の会長だった荻村伊智朗さんが「卓球は
変わります」って言い切ったんだよね。

それでその会議でプレゼンテーションもした私が、そのプロジェクトの委員長を引き受けることになった。その時に出した条件がメンバーは全員私が決めていいということ。そうじゃないと、卓球関係者がいっぱい入ってくる。それじゃあイメージが変わらないじゃないですか。

変えようと思ったきつかけはタモリの言葉でした。彼が「笑っていいとも」で「卓球がグサイ」って話をしてから、卓球のイメージが悪くなっちゃった。そこで私がやったのは、卓球台の色を変えること。ボールの色も全部変えた。ちゃんとマーケティングして調べたんだよね。

それだけじゃない、ボールを従来より大きく柔らかくすることで、スピードが出ないようにもした。これはシニアのために考えたんですけど、今、高齢者でも出来る運動として全国ですごいブームなんです。ゴルフでも何でも他の運動はみんなお金がかかるじゃないですか。でも卓球はボール一つでしょ。どの体育館でも卓球は出来ますから。

今、映像に三鷹の荻村さんの卓球場が映ってるけど、卓球台がブルーでしょ。昔は暗い緑でした（笑）。幕張で世界大会があるので新しいイベントをやるうというところで、この卓球台を使ってテレビ全局に出たんですよ。「ザ卓球デイナーショー」って言って、世界チャンピオンの試合を一試合観て、フランス料理のフルコースを食べるっていうショーです。入場者はドレスコードがあつてみんな

タキシード。それも私が全部仕掛けました。新高輪ホテルの飛天の間でやったんです。一人三万円のチケットがあつという間に売れちゃいました。私が四〇いくつかの時だったと思います。

この時期は会社も経営しながら、そして卓球部の監督もしながら、これもやっていました。だから会社がつ潰れてもおかしくない。女房にしょっちゅう文句を言われてましたよ（笑）。

卓球との出会い

卓球を始めたのは小学校四年生の時で、地元・岩手県山田町の山田中学校時代は県のチャンピオンにもなった。高校はもつと強くなりたいと思つて、当時、強かつた釜石市の高校に行った。ところがそれが大きな間違いだった。

高校の頃の話が続けると、当時、普通科は学区制だったので、私は山田町に住んでいたの、山田高校に入らなきゃならない。だけど卓球はぜんぜん釜石が強い。その頃、釜石市に尾崎高校という高校があつて、そこが強かつた。だからそこに入つたら、入つた途端に商業と工業とに分かれちゃつたの。それで卓球部は商業にあるんですよ。私は工業に入ったから、卓球台もない（笑）。

僕は中学でチャンピオンだったから、当然高校でも選手権に出たいと思つてる。だからやるしかないじゃないですか。机を壁に付けて壁にボールをぶつける、そんな練習をしてました。商業よりは弱いんですけど釜石高校も強かつた。そこに一人選手がいて「ウチに

来いよ」って言うてくれた。私より二つ上かな。だから走ってそこまで行つてた。下駄履いて一時間近く走るんですから練習にもなりませんよ（笑）。そんな苦勞の甲斐もあつて一年生からインターハイに出てました。一人での苦勞ですよ。そういう風に自分がやってきたから、後に監督になった時も、学生たちとにかく自分で考えさせなきゃいけないって思つたのかも知れない。

専修大学に入學

一年生の時から三年生までずっとインターハイに出ているんですけど、三年生になつて進學をどうしようかと考えるようになった。私が一番困つたのはお金です。親父を早くに亡くしているので。しかも兄弟八人（笑）。私は下から二番目だから、おふくろが苦勞しているのはわかつてる。おふくろは今の岩手大学、昔は岩手師範っていう名前だつたけど、そこだつたら何とか、兄貴も働いているから良いだろうって言うてくれたんです。ところが私が通つてたのは工業高校だから入試に必要だけれども習わない科目が三科目か四科目かあるんです。でもそれを習わないと岩手大学を受験出来ない。だから練習から帰つて来て、夜の一二時かな、ラジオで旺文社の講座をやつたので本を買つて勉強しました。卓球は勝ちたいからやらなきゃなんない。岩手大学に入るためには勉強しなきゃならない。そういうことをやってるうちに、人生というのは上手く出来てると思ふんですけど、三年生の全日本選手権の高校の部で、私が二位に

なつちやつた。

決勝戦は、ひと月前に東北大会で勝つた相手。だから私は、これはもう優勝したと思ひましたよ。簡単に勝つてるしね。その油断があつたのか負けてしまつて準優勝でした。準優勝したことで、慶応や早稲田など多くの大学から声がかかつてきた。その中で専修大学が一番条件が良かったんです。だつて授業料はいらぬ。合宿所があつてそれも無償。こんなこと言つていいのかわからないけど（笑）。さらに監督が私の成績を見て、大学の奨学金があるからそれを受けろつて。そうしたら月三千円も貰えることになった。それが小遣いになるから僕は家から一円も送つてもらわなすんだ。

そのかわりおふくろには必ず教職を取れつて言われました。ウチは姉貴も兄貴も六人ともみんな先生。全員岩手大学の卒業生でね、しかも結婚した相手もまた先生。先生ばかりで一二人もいるんですよ（笑）。だから私はちゃんと教職関係の授業は受けてるつて言つたけど、先生だけは絶対に嫌だと思つてた（笑）。

入學して卓球部の合宿所に入った。場所は、前の野球のグラウンドの横で、今の一〇号館のあたりかな。それも酷いもんですよ。八畳の部屋に一〇人ですよ（笑）。それが四部屋あつた。一人一畳でしょ。それで布団を出すから押入れが二段空くからそこに二人寝る（笑）。寝る時は暗幕を張るでしょ。もう夏なんかカンカン照りだね、蒸し風呂に入つてるような感じでしたよ。

卓球部の寮というか合宿所がもう一つ、駅の近くにもあつた。一

軍は上で二軍は下。三ヶ月に一回くらい入替戦をやるんです。負けたら下に降りなきゃいけない。私はそんなレベルじゃなかったから、落ちることはまずなかったんですけどね。上の合宿所は汚いけど、下は綺麗だった。だけどね、やっぱりみんな二軍には行きたくないから（笑）。

一部屋は一年から四年まで全学年の学生がいた。だから部屋の中にもしつかりと上下関係があつて、布団を敷くのも、背中を流すのも決まってきました。甘竹秀雄さん（校友会名誉会長）は同じ部屋じゃなくて隣同士だったような気がする。

ただ当時、私みたいに奨学金まで貰っている部員はいなかったんじゃないかな。そんなことは自慢にならないけど、私は生活が大変だったから、監督が受けてみるって言ったんだと思います。

最終的には専修大学に入ったけど、最後まで明治に行くか専修に行くかで迷いました。明治には青森出身の強い人がいて、その人がしょっちゅう声をかけてくれたんでね。そのままだったら明治に行つてたかもしれないけど。だけど入つてみたら専修は強かった。当時、四年生に富田芳雄さんっていう世界チャンピオンがいた。練習もあんまりしないのにすごかった（笑）。（写真を出して）これは我々が一年生の時、学校対抗で優勝した時の写真。この時、日本大学には荻村伊智朗さん、田中利明さんという世界チャンピオンが二人もいたんですよ。それを破った。これが富田さん、これが私。

この頃の専修大学には、私は二位でしたが、高校の時の優勝者が

四人もいました。でも全員がこうした団体戦で出れたわけじゃないんです。富田さんというのは左利きで、荻村さんと組んで世界チャンピオンになった。そして団体戦でも活躍している。ダブルスを組ませるなら右利きと左利きが組むのが絶対良い。専修大学に入ってくる人は、世界チャンピオンとパートナーになれるかも知れないって思つて入ってるわけです。組めば代表に選ばれるから。ある意味、富田さんは餌だったわけです（笑）。そんななか私は幸いにも一年生の時から団体戦に出場することが出来ました。

就職活動と卒業後について

専修大学を卒業後の就職については紆余曲折がありました（笑）。こんなことを言うとなんなんですけど、卓球部っていうのは当時、強かったわけです。しかも日本の卓球が世界でも注目されていた時代でしたから、どの実業団にも卓球部があつて選手はひっぱりだこなんです。八幡製鉄とか東洋レーヨンとか、専修大学のレギュラーであればそういうところに引つ張られるわけです。

私の場合は、一つ上の先輩だった甘竹秀雄さんに誘われたんです。大昭和製紙が卓球を強くしたいっていうので、甘竹さんの一つ上の先輩でキャプテンだった人が大昭和製紙に入っていた。我々の代はいっぱいいいたけど、甘竹さんの年代は甘竹さんしか強い選手がいなかったんです。それで次は甘竹さんが大昭和製紙に入ることになっていた。その次はお前来いよと甘竹さんが言うので、じゃあ私

も大昭和に行きますという話になっていたんです。

甘竹さんは当然、内定を貰って入ることになっていたんですが、ここでトラブルが起きた。卓球で起きたわけじゃないですよ。実は大昭和はその頃、都市対抗野球大会にも力を入れていたんです。何度か優勝も果たしています。その大昭和に六大学で早稲田大学が優勝した時の投手・桜井薫という選手が入ることに決まったんです。大昭和が何百万か出したって噂もあつたけど、とにかく入ると。ところが、入るということになっていたのが、もう今の人たちは知らないと思うけど、森茂雄さんという早稲田の監督がいたんです。その森さんが大洋ホエールズの監督になつちやつたんです。大学の監督がプロの監督に。今だったらありえないですよ。そうしたら森さんは、桜井を大昭和に入れないで大洋ホエールズに引つ張つちやつたんです。これに大昭和の斉藤了英さんというワンマン社長が怒つちやつて運動部を全部辞めるって言い出して、入社予定の選手を全員キャンセルしちやつた。その中に甘竹さんがいたわけです（笑）。甘竹さんも出身地の岩手に今更帰るわけにいかない。というようなことで、中央宣興というところに甘竹さんが入つたわけですよ。中央宣興株式会社というのは、日本橋にあつた広告代理店です。まあ広告代理店と言つたつて小さいわけですよ。人数は四、五〇人しかない。甘竹さんが結局、大昭和製紙に入社出来なくなつちやつた。だけど当時は、昭和三三年が甘竹さん、私が三四年卒業ですから、不況で就職難だったんですよ。ところが、我々は卓球で

会社に声をかけてもらつていたから不況なんてわからないんですよ（笑）。大昭和に頼まれたから入つてやるよという感じでもん。九州の八幡まで行くのは嫌だし（笑）。てな感じでしたわけですよ。

あの頃、実業団のほとんどが卓球に力を入れていた。東レから日興証券からどの企業もね。なぜかと言うと、選手は世界で戦うわけでしょ、だからニュースでもテレビでも新聞でも取り上げられる。今のサッカーみたいなもんだよね。

だから専修大学の先輩である渡辺紀生子さんは切手にもなつたんです。そのくらい卓球は人気があつた。リーグ戦で優勝したら、もうスポーツ新聞だったら一面ですよ。そういう意味ではね。

結局、私は大昭和製紙に行けずに、中央宣興に入つた甘竹さんの後を追う形で中央宣興に入社しました。

当時は、まだ広告代理店の給料は歩合制で、ある程度基本給はあるんだけど、一定以上を稼げば何パーセント戻しますつて、そんな時代だった。それで甘竹さんと相談した。上の人の仕事ばかりを手伝つても報奨金はその人が貰うだけなのでそれは止めよう。自分たちで開拓しよう。それで甘竹さんは甘竹さんで、私は私で新規開拓する。当然接待とかだつてあるわけじゃない。当時は麻雀が流行つてた。あんまり言つちやいけないけど賭け麻雀。甘竹さんはああいふ勝負事には強いんですよ。でも当然だけど、お客さんへの接待だから麻雀に勝つわけにはいかない。そうかと言つて負けたら自腹で払わなきゃなんない（笑）。その辺の加減が難しい。

ただたまに、その接待麻雀に自分の会社の社長とか役員が入る時があるんですよ。大事なお客さんの時は特に。そうしたらね、とにかく会社の上司からだっいたらいくら取ったっていいわけですよ（笑）。普段は私は絶対あがらないようにしている。だからもう配牌から降りていくんですよ（笑）。勝たないけど負けないようにね。

ツモられたらしようがないですけど振らないようにと。だから会社の偉い人が参加したらね、私は役満だけ狙うんです。私はその偉い人からだけ当たるのを待つんです。お客さんからは当たれないでしょ。だから甘竹さんは、見たことのないような役満で私があがるのを見てるんですよ。一晩に一回か二回だけ、あがれば役満（笑）。

広告産業はテレビが出て来て、どんどん成長していった。今は電通とか博報堂とかある。もちろん電通は当時から大きかったけど、それはテレビのおかげですよ、あんなに大きくなったのは。そんななかで二人で頑張っていたんだけど、甘竹さんは会社を辞めた。岩手で会社をやっていたお父さんに呼ばれて、自分も帰って手伝わなきゃいけなくなったから「俺戻るよ」って言って。結局、一緒に働いていた期間は四、五年だけど、良い思い出をたくさんした。

二人で開拓する。例えば甘竹さんは銀行なんかに行って、手帳とか、パンフレットとかPR誌とかそういう仕事を取ってくるわけですよ。製薬会社のPR誌とかは毎号作るわけだから結構額も大きい。そうすると三ヶ月に一度、表彰されるわけです。私は私で横浜ゴムとかホンダとかを新規開拓する。そうするともう給料の何倍も三ヶ

月に一回入る。電車になんか乗らないんです。毎日タクシーですよ。休みになると、白タク雇って日光行ったり箱根行ったり（笑）。二〇代前半の卒業したての人間がやるような生活じゃなかったね。

卓球部の監督に

中央宣興時代は卓球部にはほとんど出入りしてません。仕事仕事でね。監督やってるのがOBだったから総会とか祝勝会に顔を出したり、会費を納めたりする、それぐらいの関係でしたよ。私は卓球とはずっと無縁だったんです。中央宣興を四〇歳で辞めて独立して、今の会社、広告代理店コモンズを創業した。それでも無縁だった。

でも卓球部の監督が、期の途中で海外へ行くことになったんですよ。国内勤務が海外になっちゃったわけです。それで、その監督がいない期間の六ヶ月を誰かが見てほしいという話になった。それで偶然、そこへ行ったら、甘竹さんはその場にはいなかったんですけど、もつと上の先輩がいて、「波岡、お前は東京にいるんだから、その間だけちょっとお前が見ろ」って言うんです。私も独立したし、まあ多少は時間も思い通りになるから「じゃあ六ヶ月ですね、いいですよ」と言ってしまった。これが私の運の尽きだった（笑）。

だって引き受けてみたら、もう弱い選手ばかりなんです。春のリーグ戦が終わった後の夏に引き受けた。そうして秋のリーグ戦を実際に見て、学生たちを集めて、「この中で全日本に出た選手は何人いるのか」と聞いてみたんです。だって各地区からスカウトされ

来てると思っているから。でも誰も手を挙げない。「インターハイか国体でも何でもいいんだよ、全国大会に出た選手は誰と誰なんだ」と言ってもまだ誰も手を挙げない。もう真つ青になりましたよ。こんな選手で一部で戦えるのかと。学生たち自身が持っている自分への考え方やイメージを変えなきゃダメだとそれから必死に色んなことをした。

青森から来てる人もいるわけですよ。青森商業は当時強かったからね。そこから来た選手もいるけど、一番は来ていない。全国大会に出ない選手ばかり、他の高校から来た子もそうですよ。

当時は熊谷商業も強かった。熊谷商業には吉田安夫さんって人がいた。彼は全国から選手を集めていたんだけど、その人が後に熊谷商業を辞めて青森山田へ行った。青森山田はそれで強くなって、今でも人を全国から引つ張ってる。その一人が福原愛ちゃんだよ。

それから男子は京都の東山も強かった。女子は神奈川の京浜女子（現・白鷗女子）、それから大阪の天王寺。今でも天王寺は強いですよ。この二校はライバル同士。それから柳川商業も男女とも強かった。だけど、そうした高校で全国に行った選手は専修大学にはいなかった。

だけど何とかしなきゃいけない。こんな状況で六ヶ月で辞めますとは言えないじゃないですか。学生たちを見てると、これが練習かと思うような態度なんです。これは怒ってもしようがない。でも春のリーグ戦を戦わなきゃいけない。選手を勧誘するために高校に

行くけど、「いやあ昔の専修は強かったですよ」って言うだけで送ってきてもくれないうですよ（笑）。しょうがないから、現有戦力でいくしかない。それで、とにかく今の練習を止めさせて、トレーニングの順序を書いて、こういうことをしたら練習に来ていい。それで来た選手から、上手・下手は関係なしに試合に使うと言ったんです。そうすると、みんなやっぱりリーグ戦には出たいわけですよ。それで一人、二人とあがって来て、そのうちに人数が揃ってきた。

だけど、それだけじゃとても勝つというところまではいかない。それで、今度は伊藤繁雄とか元チャンピオンクラスのみんなを集めて、一人のコーチが、男子選手一人と女子選手一人の計二人を専任でコーチするという制度をつくった。コーチはほとんどが元チャンピオン、それが男子一人、女子一人を見るっていうルールです。

ちょうどその頃、私のオフィスが赤坂にあって、その下で私は四軒の食べ物屋をやっていた。そこにOBが集まって食べて飲む。するとOBも一食一飯の恩義が出来てきてね、みんな会議に来てくれるようになったわけです。だから専任コーチという体制をつくる事が出来たんです。誰をコーチにするかは学生に選ばせることにした。そうしたら世界チャンピオンの伊藤繁雄がね、「私にいつぱい指名がきたらどうするんですか」と言うんです。「その時は抽選でもいいからやる」と私は言ってやった。だけど、誰も伊藤に教えてもらいたいと思ってる人はいないわけですよ。うるさいから（笑）。

コーチには私から一つだけ条件があると言った。それは卓球の話は一切しないということだと。そうすると、コーチみんなが「えっ」という顔をする。卓球の話をしてほしくないでどうやって強くなるんですか、みたいな。いやそうじゃないと。私から見ても学生の気持ちが悪化している。彼らはその気にさせてから、教えてほしいと。こういうことが知りたいと言ってきたら教えてもいいけど、自分たちからフットワークが悪いとか、打ち方がどうだとか言っちゃったら絶対ダメだと。

そのかわり、一週間に一度、当時は携帯がないから、学生からコーチに電話をかけさせるようにして、とにかく男子と女子、二人の意見を聞くようにしてもらった。そのうえで毎週土曜日に私の会社を集まる。そして夜遅くまで話をした。そのうち、電話や手紙じゃ伝えにくいので、本人たちを呼んで話をしても良いですかと不出すコーチが出て来る。だからそれは良いよと言うと、そのコーチが次の時に選手本人を呼んで、すき焼きを食べさせながら話を聞いたら、こういう悩みがあったとか、ああいう悩みがあったとか選手も言うわけですよ。それを、それぞれのコーチが私に言い始めるようになる。

そうしたらコーチも大学に行くようになる。ただ行ってもコーチは自分の担当しか見ないわけです。だけど、そこでコーチが学生を教えるのを見れば、他の学生も気が付くわけですよ。そうすると、コーチの誰かが土日になると行っている、というような雰囲気

が出来上がってくる。

そうして学生の眼にやる気が出て来ると、あとはどうやるかという問題になってくる。たとえばカットが出来ないのなら、カットが出来ないのはこういうところがいけないから出来ないんだと教えてやる。私はカットマンに負けたことがないから、カットマンに勝つためには、こういう打ち方が必要なんだと教えてやる。こうすると攻めることは出来なくともミスすることがなくなるのでラリーが続いてくるとかね、やり方もいっぱい出来るわけですよ。

当時、明治大学に齊藤清君という全日本卓球選手権で四連覇したすごい選手がいた。リーグ戦で齊藤に勝つための練習をやったら本当に勝ったんです。でもまだまだ強くなるには時間がかかる。次の年の春もまた入替戦になった。入替戦だけれども前よりはまあまあ良いわけ。入替戦は早稲田で、早稲田は我々の試合だけビデオに撮ってる。早稲田の監督に、「なんでウチだけ撮るんだ」と聞いたら、「いやあ、専修の試合は参考になるから」と。冗談じゃない、俺んとはじりだつて知ってるからだと言つてやった(笑)。ということでも何度も入替戦を経験した。いつもこれで二部に落ちるかなと思つていたけれども、それでも四対三とか、四対二とかギリギリで勝ってきた。

それでも学生に力が付いてきたなということ、今度はその次の夏の全日本選手権が名古屋であったんです。そこへ出場した。最初の二日か三日は予選リーグなんです。勝つと決勝にあがれるわけ

です。何とかそこを勝ち上がって、今日が予選会の最終日という日に、マネージャーがみんなに切符を配ってるんです。なぜかと聞くと、今日は勝てないと思ってるから最終の新幹線で帰ると言う。「なんだ」って言ったらね、「いや今日は最終日なんでチケットだけ渡しておきます」って言うんです。「だって明日も試合あるだろ」って言ったら、「監督さん、そんなこと言ったってもうお金がないんです」って。卓球部はお金がないんですよ。しょうがないから、全部切符は払い戻させて、宿にも「今日また一泊しますから」と。それは私が持ちました。

女子はまあ残れるぐらい強いんですけど、問題は男子なんです。だけど男子も残って次の日やるとそれぐらいの気持ちでいました。それで次の日に近畿大学とやった。ダブルスが真ん中に入って五試合だから、三ゲームを取ったほうが勝ちなんです。それで準決勝は近大に勝って、決勝は明治を破った大正大学とあたったんですが、大正大学はこの時、ものすごく強かった。大正にはリーグ戦でも一点も取ったことがない。全部四〇ですよ。もうレベルがこんな違う。そんな相手と決勝ですからね。でも向こうの監督は初めての優勝になるから腕を組んで緊張してるわけですよ。これはひよっとしたらひよっとするぞと思ってました(笑)。だけど、こっちはインターハイにも出たことのない選手ばかりでしょ。しょうがないから、強い選手を順番に並べて、それで一点でも取ればいいなど。それで一番最初にやる選手には「お前が勝てないことはわかっている

けど、元気だけは三倍以上出せ」「一本取ったら声を出せ」と言ったらわかりましたって。それで最初にサーブ打ったら一本取ったんですよ。そうしたら選手がコート一周して「ワァァァ」ってやったから相手がビビっちゃって(笑)。それでね、最初は勝って、次が負けて、それでダブルスが勝ったのかな。それで最後までいったんですよ。最後はもうメンバーがいらないから、一般学生ですよ。高校でちよつと卓球やってたからって卓球部に入ってきた。今は大学で監督をしている藤川君っていうの。彼が一般学生でラストです。それで彼もまたこう(腕を挙げて)やってね、大騒ぎしてやっちゃったから、結局勝っちゃったんですよ。全日本の団体で、全日本に出てない選手だけで勝ったっていうのは後にも先にも初めてだっていうことで、当然その夜は祝勝会ですよ。だからまた一泊した(笑)。

帰りの新幹線も大変でした。コーチたちも気になるからみんな来てるわけですよ。彼らもみんな興奮してね。あの当時は新幹線に食堂車があった。しかも席を取ってなくて自由席も混んでるようだから食堂車に行って、そうしたら伊藤繁雄が何をするのかなと思ってたら、カウンターに並んでたウイスキーをみんな持ってきて、「波岡さん良いですよね？」って言う(笑)。結局、食堂車で東京駅に着くまで、ほとんど全部飲んじゃいました(笑)。だけど私も興奮してますから。私の戦略が当たったと。勝つためには何が大事かという話もたくさんしました。

さっきも言ったように卓球部はお金がなかったから、監督時代は

かなりの金額を持ち出しました。年間にすると三百万ぐらい。だって選手の勧誘のために全国に行かなきゃなんない。行ったら行った夜は地元の先生の接待をしなきゃなんない。もちろんそれでも選手が来るかどうかわかりませんよ。それでもどうしても必要です。前に言ったように専修には入れてくれない先生がいて、これは先生だけじゃダメだと思って、先生の住所はわかってましたから。ちなみにその人は吉田安夫さん、福原愛ちゃんを育てた先生ですよ。その人の家の奥様に勝った数だけのバラを贈るんです。そんなことをやる人間じゃないわけですよ。そうすると、それで選手を送ってくれるようになった(笑)。

卓球部によるピンポン外交

川島正次郎先生は、昭和四〇年代に日本学生卓球連盟の会長をやったんです。その時、優勝旗を贈呈してるんです。だから今でも川島杯というのがある。卓球部がよく優勝するので、男子はあんまりご馳走してもらった記憶はないんですけど、川島先生は女子にはいつも中華か何か美味しい物をご馳走してくれるんですよ(笑)。そんな川島先生との関係もあってか、卓球部は、日本の外交政策にも一役担ったことがあるんです。

日本と中国に国交がなかった時代の話です。自民党の副総裁として川島先生が第一回バンドン会議に出席した際に、周恩来首相が川島先生に、中国はこれから卓球を強くしたいので松崎キミ代に学ば

なきゃいけないといった話をしたそうです。それぐらい松崎は中国でも有名でした。その頃の専修大学はとても強くて、春秋のリーグ戦も学校対抗も全部優勝するぐらいだった。当時、北朝鮮で平壤オープンという世界と同じルールでやっている大会があった。参加国は中国とかソ連とかブルガリアとか共産系国家しかいなかったんだけど、荻村さんが日本も参加すると言って、第一回から日本は参加していた。ただ日本卓球協会もお金がなかったんでしょね、「波岡さん、男女ともリーグ戦と学校対抗に優勝しているので協会が推薦するから専修大学の卓球部で平壤に行ってくれ」って言うわけです。当時の理事長の森口忠造先生のところに行って、実は日本卓球協会からこういう推薦状をいただいたんですけど、卓球部にはお金がないし、日本代表と言っても専修大学だからと言ったら、「君、何を言ってるんだ。選ばれて辞退するっていうのは不名誉なことだ。お金は大学がちゃんと出す」と言ってくれたんです。

それで男女とも専修大学の選手が出場することになったので、みんなで北京の北朝鮮大使館へ行って、そこでビザを初めてもらって、平壤に入ることになった。ところがまだ国交がないから北朝鮮に行く飛行機はないわけです。ここから先は北朝鮮が連れて行ってくれることになっていました。我々が乗ったのは軍用機ですよ。それで平壤空港に行った。そこから街中までは選手はバスですけど、私なんかはベンツに乗った。もう街では人びとが日の丸の旗を振ってるんですよ。それで結局、北朝鮮には二週間いました。世界大会

と同じルールで個人戦、ダブルス、ミックス、団体とやるから、それだけかかるんですね。

国交のない時代に卓球を通して、日本、中国、北朝鮮が繋がっていた。いわゆる「ピンポン外交」と呼ばれた政策に専修大学の卓球部は関わっているんですよ。

そういう意味でも、僕は卓球部っていうのは専修大学の運動部のなかでも別格だったと思うんです。確かに野球部とか色々他にも強い部活はあります。しかし、世界でチャンピオンになるほど活躍した選手を輩出した運動部はないじゃないですか。それも一人だけじゃないですよ。たくさんいるわけです。それに二部に落ちたことがないのも専修大学だけなんです。私が監督の時は危なかったけど(笑)。だからこれからどう復活していつてくれるのかとても楽しみです。

平壤の帰りに中国によって中国の大学と専修大学として卓球の試合をすることになっていました。森口先生も中国の学生の試合を観たいと言うことになり、専修大学からも理事長、学長、能城先生も中国に来るようになりました。このことを荻村さんに話したら、「波岡さん、森口先生が中国に行くのであれば私も行って中国卓球協会の会長に専修大学歓迎会をさせよう」と言って中国に来て段取りをしてくれました。

中国での試合の前日の夜、中国卓球協会の会長や役員総出で「歓迎晩餐会」を北京飯店で行ってくれました。中国卓球協会をあげて

の晩餐会は素晴らしいものでした。(森口先生が戦争中、毎日新聞時代に中国に取材で滞在していたことも後で知りました。)

次の日、中国学生と試合をして予定は無事終了しましたが、森口先生から答礼晩餐会をしたい、と言われました。北京飯店のつもりでしたが、森口先生が「昨日ここでパーティーをしてもらったので、ここより良いところでやろう」と希望。しかし、この頃は北京飯店が中国で一番のホテルでここより良いところはない、と伝えました。それでも探してほしいと言われ、同行していた世界チャンピオンの松崎に相談したところ、人民大会堂にもレストランがあるとのこと。彼女に頼んで当時政治局員だった故周恩来首相の奥様の線から人民大会堂の中にある「四川の間」で答礼晩餐会を開けることになりました。その旨を中国卓球協会の会長に伝えたところ、「そこは制限が厳しく協会の役員も会長以外は入ったことがない。奥さんや子どもも是非入れて欲しい」ということになりました。結局三〇人近くの家族分も入れた招待状を作って晩餐会を行いました。

答礼晩餐会の最後に森口先生が「何か中国の役に立てることはないか?」と話しました。中国卓球協会の会長から数日前に中国政府が万里の長城修復のための募金活動を行う発表をした、と情報がありました。それを聞いて森口先生が「明日帰国するので持っている金を皆で集めて寄付をしよう」ということになりました。レンガ一個が一元ということで全部集めたら結構な金額になり、急遽メディアを集めて「贈呈式」を行いました。この記事が翌日人民日報に載

り、協会の人が空港まで新聞を持ってきてくれました。

後日談になりますが、中国の協会会長が日本での国際大会のために来日された時にレンガの写真を持ってきました。それは「万里の長城修復」の第一号記念レンガだそうで森口先生の名前が入っていました。森口先生も感激していました。これも日中関係に役立ったのではないのでしょうか。

※この記録は、平成二七年六月一日に波岡實氏（昭和三四年商経学部経済学科卒）に対して、瀬戸口龍一および石綿豊大（ともに大学史資料課）がコモンズ株式会社応接室に行った聞き取り調査をまとめて、波岡氏にご確認いただき、掲載したものである。